Japanese Journal of Applied Psychology
2011, Vol. 36, No. 2, 136-137

短　報

親密な観衆が存在するときの複数観衆問題
—同性観衆の存在が異性への身体的魅力呈示に及ぼす影響—

笠置　遊*,**・大坊郁夫*

The Response to Multiple Audience Problem Where the Presenter's Friends Is Observing

Yu KASAGI and Ikuo DAIBO

This study how people can handle the multiple audience problem of self-presentation, when facing two or more audiences and wanting each audience simultaneously to form or maintain a different impression of them. In the laboratory, female participants had a brief conversation with either an opposite-sex or a same-sex confederate. The results showed that before the conversation, the participants wanted to present themselves physically more attractive to the opposite-sex audience than to the same-sex one. On the other hand, when the same-sex friend was observing their conversation, the participants presented themselves to the opposite-sex audience physically less attractive. It was revealed that the compensatory self-enhancement do not occur in case where the audience is an intimate person.

key words: multiple audience problem, self-presentation, close relationships, compensatory self-enhancement

目　的

複数観衆問題 (multiple audience problem) とは，異なる印象を与えたい2人以上の観衆が同じ場面に存在するとき，どの観衆に合わせた自己呈示を行えばよいのかというジレンマに陥ることである (Fleming, 1994)。複数観衆問題に陥り，自己呈示に失敗すると，観衆との関係の崩壊や自尊心の低下を招く (Leary, 1999)。

笠置・大坊 (2010) では，複数観衆状況に直面した人々が，補償的自己高揚呈示 (Baumeister & Jones, 1978) を行うことを明らかにした。補償的自己高揚呈示 (compensatory self-enhancement) とは，観衆に対する自己呈示に失敗する，もしくは失敗を予測すると，別の次元で自分を肯定的に呈示するというものである。笠置・大坊 (2010) では，異性の会話相手への自己呈示場面に同性の観察者が居合わせるという複数観衆状況に直面した人が，外見的魅力の自己呈示を控える代わりに，外見的魅力以外の特性を積極的に呈示することが示された。

しかし，従来の研究では，自己呈示を行う話者と観察者が既知関係である場合を扱っていない（笠置・大坊，2010; Van Boven, Kruger, Savisky, & Gilovich, 2000)。Baumeister & Jones (1978) によると，会話相手との関係が親密になるほど，自分についての情報を多く知られているため，偽りや誇張といった自由に自己呈示できる範囲が狭まってしまう。つまり，話者と会話相手，観察者との親密性が増すにつれ，話者が補償的自己高揚呈示に用いることのできる特性が限られるのである。本研究では，異性への自己呈示場面に同性の他者が居合わせる状況に着目し，話者と観察者が親密な関係にあるとき，話者が複数観衆問題にどのように対処するのかを検討する。

方　法

実験参加者　大阪府の某国立大学での講義時に参加者を募り，友人関係にある女子大学生17組34名（平均年齢20.50歳，$SD=1.11$）が実験に参加した。

協力者　参加者の会話相手として，大学生2名（男女各1名; 25歳）に協力を依頼した。要求特性を排除するため，会話内容・態度について，十分な訓練を行い，服装も統一した。2名とも全参加者との面識はなかった。

自己呈示動機尺度　相手に対して各特性をどの程度示したいと思ったかを回答する尺度（谷口・大坊，2005; 12項目7件法）を用いた。この尺度は，外見的魅力，有能さ，社会的望ましさ，個人的親しみやすさの4つの下位因子よって構成される。下位因子ごとに各項目の平均値を算出し，各因子の得点とした（α 係数はいずれも .83 以上)。

実験手続き　実験は，友人関係にある2名と協力者1名（同性または異性）の3名で行われた。参加者は実験室に到着した後，別の参加者を装ってあらかじめ待機していた協力者の隣に着席した。そして，会話の展開についての実験であり，2名ずつ順番に会話をするように教示された。次に，個別ブースに移動し，自分以外の2名（協力者，もう1名の参加者）に対する会話前の自己呈示動機を評定した。その後，参加者は，話者と観察者のいずれかの役割にランダムに割り当てられた。話者は，会話相手の協力者と対面して椅子に着席し，親しくなるように会話をするよう教示された。その際，話者が協力者との将来的な相互作用

* 大阪大学大学院人間科学研究科
** 日本学術振興会特別研究員
Graduate School of Human Science, Osaka University, 1-2 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, Japan

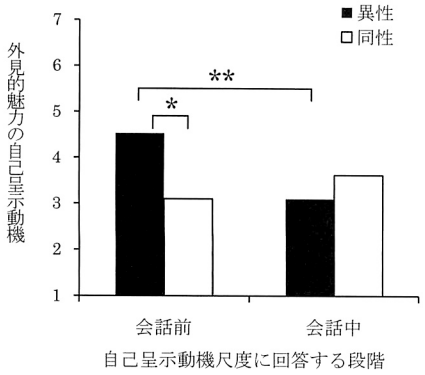

Figure 1　会話相手の性別および自己呈示動機尺度に回答する段階による外見的魅力についての自己呈示動機得点の比較 (*$p<.05$, **$p<.01$)

の期待を持つように，会話後に再度２人で会話を行うことを強調した。また，観察者は，次に自分が会話をする前に様子を把握しておくという理由で，話者と協力者から２m離れた椅子に着席した。そして，話者と協力者は９分間の会話を行い，その様子を観察者が観察した。会話終了後，話者は，個別ブースに戻り，協力者および観察者に対する会話中の自己呈示動機を評定し，ディブリーフィングを行った。

結果と考察

操作チェック　本実験では話者 ($n=17$) と観察者が同性であるため，複数観衆状況は，会話相手となる協力者が異性の場合にのみ生起するはずである。そこで，協力者の性別（同性・異性）と自己呈示相手（協力者・観察者）を独立変数，会話前の話者の自己呈示動機の４つの各下位因子を従属変数とする分散分析を行った。その結果，外見的魅力について協力者の性別×自己呈示相手の交互作用が有意傾向であり ($F(1, 15)=3.19$, $p<.10$)，協力者が異性の条件でのみ，観察者 ($M=3.20$, $SD=0.92$) よりも協力者 ($M=4.53$, $SD=1.19$) に対する自己呈示動機が高かった ($F(1, 15)=5.56$, $p<.05$)。つまり，異性との会話場面を同性の友人が観察するという実験操作によって，複数観衆状況が生じていたといえる。なお，外見的魅力以外の自己呈示動機については，有意な主効果，および交互作用は見られなかった (Fs<1)。

複数観衆状況における自己呈示動機　異性の協力者への自己呈示場面を，同性の友人が観察している複数観衆状況において，話者の自己呈示動機が他の条件と比べてどのように異なるのかを検証するため，自己呈示動機の４つの各下位因子について，自己呈示動機尺度に回答した段階（会話前・会話中）と協力者性別（同性・異性）を独立変数とする分散分析を行った。その結果，外見的魅力についての自己呈示動機では，回答段階×協力者の性別の交互作用のみが有意であった ($F(1, 15)=8.32$, $p<.05$)。単純主効果検定の結果，会話前よりも会話中において，異性の協力者に対する話者の外見的魅力についての自己呈示動機が低下することが示された ($F(1, 15)=8.93$, $p<.01$) (Figure 1)。また，会話前では，同性よりも異性の協力者に対する自己呈示動機が高いが ($F(1, 15)=7.12$, $p<.05$)，会話中では，同性と異性の協力者に対する自己呈示動機に有意差は無くなった ($F<1$)。このことから，会話前は異性に対して外見的魅力を積極的に呈示したいと動機づけられているが，会話中は，同性の友人へのネガティブな印象の伝達を避けるため，外見的魅力の自己呈示を控えたと考えられる。

一方，外見的魅力以外の自己呈示動機では，同性の観察者の存在や会話相手の性別による差は見られず (Fs<1)，補償的自己高揚呈示は行われないことが明らかとなった。これは，話者と観察者が親密な友人関係にあることで，話者は自分についての情報を観察者に多く知られているため (Baumeister & Jones, 1978)，誇張的な自己呈示ができず，補償的自己高揚呈示を行えなかったのではないかと考えられる。

今後は，男性も対象とした実験，また，話者と会話相手との親密さも考慮した検証も必要であろう。

引用文献

Baumeister, R. F., & Jones, E. E. 1978 When self-presentation is constrained by the target's knowledge: Consistency and compensation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 608–618.

Fleming, J. H. 1994 Multiple audience problems, tactical communication, and social interaction: A relational-regulation perspective. *Advance in Experimental Social Psychology*, **26**, 215–292.

笠置　遊・大坊郁夫 2010 複数観衆問題への対処行動としての補償的自己高揚呈示　心理学研究，**81**, 26–34.

Leary, M. R. 1999 The social and psychological importance of self-esteem. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 197–221.

谷口淳一・大坊郁夫 2005 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討　実験社会心理学研究，**45**, 13–24.

Van Boven, L., Kruger, J., Savisky, K., & Gilovich, T. 2000 When social world collide: Overconfidence in the multiple audience problem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 619–628.